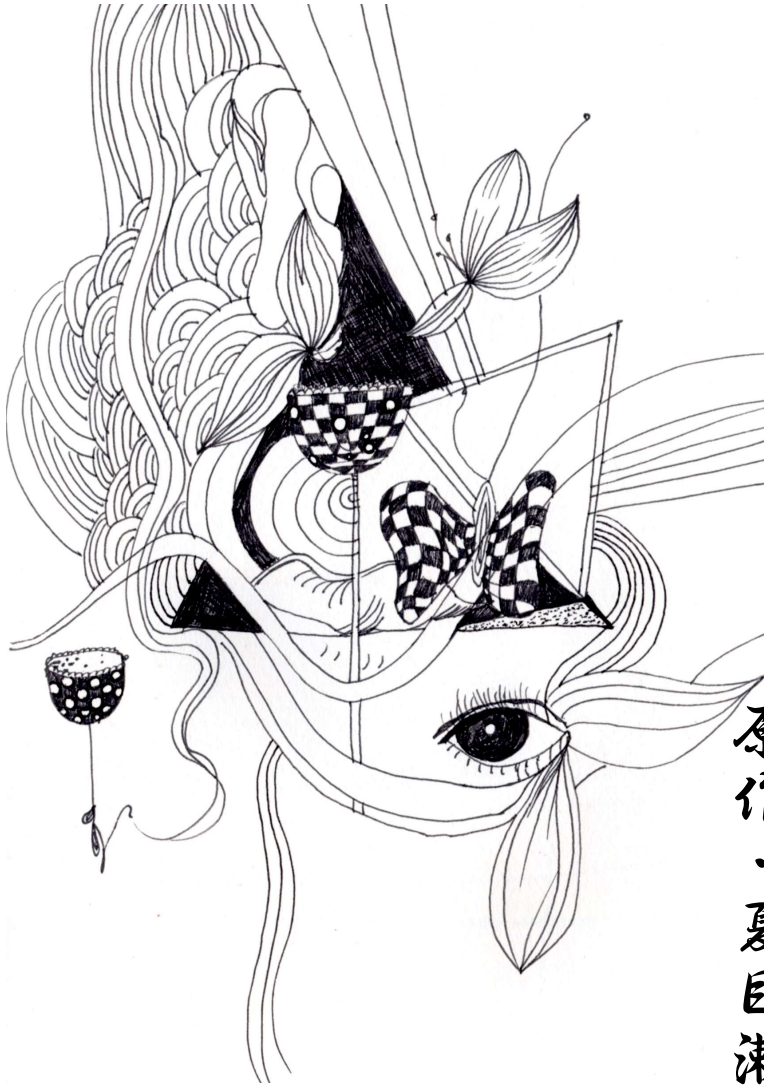


LEVEL

5

Web  
Tadoku  
Books



ゆめじゆうや  
夢十夜

(だいいちや  
第一夜・だいさんや  
第三夜)

げんさく  
原作・夏目漱石  
なつめ  
そうせき



朗読音声のダウンロード  
Audio download

## ★よまえ読む前に Before you read

### 《多読の読み方》

多読とは、とてもやさしい本から楽しくたくさん読んで日本語を身につけていく方法です。

次の4つのルールを守って楽しく読みましょう。

1. やさしいレベルから読む
2. 辞書を引かないで読む
3. わからないところは、とばして読む
4. 進まなくなったら、他の本を読む



### 《How to do Tadoku》

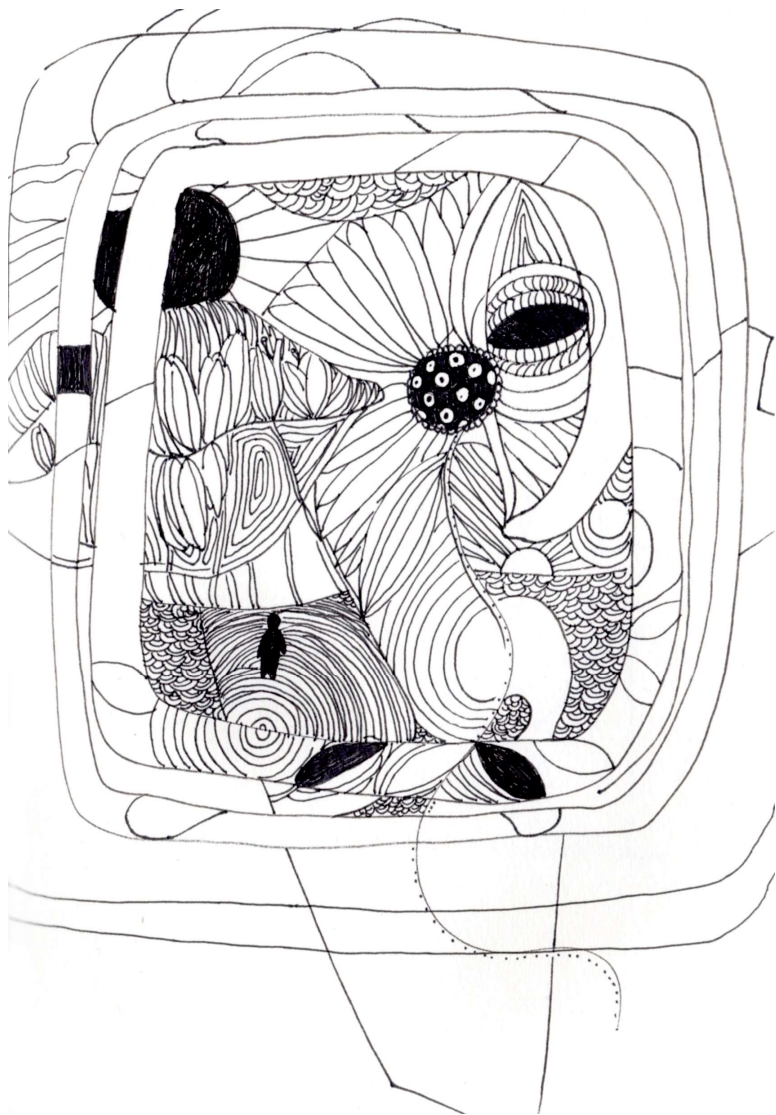
Tadoku recommends that everyone should start with very easy books and enjoy a lot of them following the 'Four Golden Rules' below.

1. Start from scratch.
2. Don't use a dictionary.
3. Skip over difficult words, phrases and passages.
4. When the going gets tough, quit the book and pick up another.



# 第一夜

『ゆめじゅうや 夢十夜』は、作家・夏目漱石が書いた十の不思議な夢の話で、神話の時代、鎌倉時代、百年後と、さまざまな時代の話が出てきます。ここでは、第一夜と第三夜を紹介します。



こんな夢を見た。

寝ている女の枕のそばに座っていると、女が、静かな声で「もう死にます」と言う。女は髪が長く、美しい顔をしている。頬が少し赤く、唇の色も、もちろん赤い。全く死にそうには見えない。しかし、女は静かな声で、「もう死にます」とはっきり言った。私も確かに、これは死ぬと思った。そこで、「そうか、もう死ぬのか」と上から女の顔を見ながら聞いてみた。「もちろん死にますよ」と言いながら、女はぱっちりと目を開けた。大きくきれいな目で、その真っ黒な目に私の姿が映っている。

私は海のように深く見える女の黒い目を眺めて、これでも死ぬのかと思った。それで、女の耳のそばに口を近づけて、「死ぬんじゃないだろうね、大丈夫だろうね」とまた聞いた。すると女は、やっぱり静かな声で、「でも、死ぬんですもの、しかたがないわ」と言った。

「じゃ、私の顔が見えるか」と聞くと、「見えるか、って、ほら、私の目に、あなたが映<sup>うつ</sup>ってるじゃありませんか」と、にこりと笑<sup>わら</sup>った。私は黙<sup>だま</sup>って顔を上げた。本当に死ぬ<sup>し</sup>のかなと思った。

しばらくして、女がまた、こう言った。

「死<sup>し</sup>んだら埋<sup>う</sup>めてください。大きな真珠<sup>しんじゆ</sup>貝<sup>がい</sup>で穴<sup>あな</sup>を掘<sup>ほ</sup>って。そうして空<sup>そら</sup>から落<sup>お</sup>ちてくる星<sup>ほし</sup>の破片<sup>はへん</sup>をその墓<sup>はか</sup>の上に置<sup>お</sup>いてください。そうして墓<sup>はか</sup>のそばで待<sup>ま</sup>っていてください。また会いに来<sup>き</sup>ますから」

私は、「いつ会いに来<sup>き</sup>るか」と聞いた。

「日<sup>ひ</sup>が出るでしょう。それから日<sup>ひ</sup>が沈<sup>しず</sup>むでしょう。それからまた出るでしょう。そうしてまた沈<sup>しず</sup>むでしょう。赤い日<sup>あかひ</sup>が東<sup>あづま</sup>から西<sup>にし</sup>へ、東<sup>あづま</sup>から西<sup>にし</sup>へと落<sup>お</sup>ちていく間<sup>ま</sup>、あなた、待<sup>ま</sup>っていられますか」

私は黙<sup>だま</sup>ってうなずいた。女は静<sup>しず</sup>かだった声を少し大きくして、

「百年待<sup>ま</sup>っていてください」と言った。

「百年、私の墓<sup>はか</sup>のそばに座<sup>すわ</sup>って待<sup>ま</sup>っていてください。きっと会いに来ますから」

私はただ「待<sup>ま</sup>っている」と答えた。すると、女の黒い目の中に映<sup>うつ</sup>っていた自分の姿<sup>すがた</sup>が、ぼうっと崩<sup>くず</sup>れてきた。静<sup>しず</sup>かな水が動<sup>うご</sup>いて、そこに映<sup>うつ</sup>っていた影<sup>かげ</sup>が崩<sup>くず</sup>れるように。崩<sup>くず</sup>れ出したと思<sup>おも</sup>ったら、女の目がぱちりと閉<sup>と</sup>じた。涙<sup>なみだ</sup>が頬<sup>ほお</sup>に流<sup>なが</sup>れた。もう死<sup>し</sup>んでいた。

私はそれから庭<sup>にわ</sup>へ出て、真珠貝<sup>しんじゆがい</sup>で穴<sup>あな</sup>を掘<sup>ほ</sup>った。貝に月の光が当たり、土を掘<sup>ほ</sup>るたびにきらきら光った。土のおいもした。しばらく掘<sup>ほ</sup>ると、大きな穴<sup>あな</sup>ができた。

私は女をその中に入れた。そうして柔<sup>やわ</sup>らかい土を上から静<sup>しず</sup>かにかけた。かけるたびに貝に月の光が当たり、きらきらした。

それから私は、落<sup>お</sup>ちていた星の破片<sup>はへん</sup>を拾<sup>ひろ</sup>ってきて、土の上に置<sup>お</sup>いた。胸<sup>むね</sup>と手が少し暖<sup>あた</sup>かくなった。星の破片<sup>はへん</sup>は丸<sup>まる</sup>かった。長い時間をかけて落<sup>お</sup>ちてくる間に、丸く

なつたんだらうと思つた。

私は草の上に座すわつた。これから百年の間、こうして待つて待まっているんだなと考かんえながら、丸い墓石はかいしを眺ながめていた。そのうちに、女の言いつた通り、日が東から出た。大きな赤い日だった。それがまた女の言いつた通り、西へ落おちた。赤いまま、落おちていつた。「一つ」と私は数かぞえた。

しばらくすると、また赤い日が上のぼつてきた。そうして沈しずんだ。「二つ」とまた数かぞえた。

私は、こういうふうの一つ二つと数かぞえていくうちに、赤い日をいくつ見たかわからなくなった。数かぞえても、数かぞえても、数かぞえきれないほど赤い日が頭の上を過すぎていった。それでも百年がまだ来ない。私は、丸い墓石はかいしを眺ながめて、女が嘘うそをついたのではないだらうかと思おもい始はじめた。

すると、石の下から、自分の方むへ向むかつて、何かなにが伸のびてくるのに氣きがついた。

それはどんどん伸びて、ちょうど自分の胸のあたりまで来て止まった。と思ったら、静かに揺れる茎の先に、真っ白な百合の花が開いた。花からは、体の芯まで届くほどの強いにおいがした。そこへ上の方からぽたりと露が落ちたので、花はふらふらと動いた。私は顔を近づけて、冷たい露のついた、白い花びらにキスをした。顔を上げた時に、思わず遠くの空を見たら、少し明るくなった空に、星が一つ光っていた。

「百年はもう来ていたんだな」と、この時はじめて気がついた。



だいさんや  
第三夜



こんな夢を見た。

六つになる子どもを背中におぶっている。確かに自分の子である。ただ、不思議なこと、いつからかこの子どもは目が見えなくなっている。私が、「おまえの目はいつ見えなくなったのか」と聞くと、「昔からさ」と答えた。声は子どもの声だが、話し方はまるで大人である。

左右には田んぼがある。道は細い。暗い中に時々鳥の影が見える。

「田んぼへ来たね」と背中で子どもが言った。

「どうしてわかる？」と顔を後ろへ向けて聞いたら、

「だって鷺が鳴くじゃないか」と答えた。

すると、本当に鷺が二回ほど鳴いたので、自分の子どもではあるが、少し怖くなつた。こんなものをおぶっているのは、この後どうなるかわからない。どこかに捨てるところはないだろうか、と向こうを見ると、暗い中に大きな森が見えた。あそこ

ならいいだろう、と考えた時、背中で

「ふふん」と言う声が出た。

「どうして笑うんだ」

子どもは返事をしなかった。ただ、

「父さん、重いかい？」と聞いた。

「重くはないよ」と答えると

「もうすぐ重くなるよ」と言った。

私は黙って森の方へ歩いていった。田んぼの中の道はまっすぐではなく、なかなか森へは近づけない。しばらくすると、道が二つに分かれているところに出た。私はそこに立って、ちよつと休んだ。

「この辺りに大きな石があるはずだ」と子どもが言った。

見ると、なるほど、目の前に大きな石がある。石には左、日ヶ窪、右、堀田原と

書いてある。暗い中に、赤い字がはっきりと見えた。

「左がいいだろう」と子どもが命令した。左を見るとさっきの森の木の影が、自分たちの方へ暗く伸びていた。行くべきかどうか考えていると、

「行けばいい」と子どもがまた言った。私は仕方なく森の方へ歩き出した。心の中では、目が見えないのに何でもよく知っているなど考えながら、一本道を森へと近づいていくと、背中（せなか）で、「どうも目が見えないと不自由（ふじゆう）でいけない」と子どもが言った。私が、

「だからおぶってやっているんだ。いいじゃないか」と言うのと、

「おぶってもらって申し訳（わけ）ないが、どうも人にばかにされていけない。親にまでばかにされるからいけない」と子どもが言う。

それを聞いて、何だか嫌（いや）になった。早く森へ行って捨ててしまおうと思って急（いそ）いだ。

「もう少し行くとわかる。あれはちょうどこんな晩（ばん）だったな」と、子どもは、背中（せなか）

で独り言のように言っている。

私は、

「何が？」とやっと声に出して聞いた。

「何がって、父さんも知ってるじゃないか」と子どもはばかにしたように答えた。すると、何だか自分も知っているような気持ちになった。けれどもはつきりとはわからない。ただ、こんな晩だったように思える。そしてもう少し行けばわかるように思える。わかったら大変だから、わからないうちに早く捨ててしまつて、安心してはならないように思える。私はますます早く歩いた。

雨はさつきから降っている。道はだんだん暗くなる。私は黙って歩き続けた。ただ、背中に小さい子どもがいて、その子どもが私の昔の事も、今の事も、これらの事も、全てわかっている。しかもそれが自分の子である。そして目が見えないのである。私は怖くてたまらなくなつた。

「ここだ、ここだ。ちょうどその杉すぎの木の下の下だ」

雨の中で子どもの声はつきり聞こえた。私は足を止めた。気がつくとも森の中に入っていた。そこにある黒いものは、子どもの言う通り、確かに杉すぎの木に見えた。

「父とうさん、その杉すぎの木の下の下だったね」と子どもが言う。

私は「うん、そうだ」と思わず答えてしまった。

「文化五年だろう」と子どもが言った。

確かに、文化五年のことだったように思った。そう思っていると、また子どもが言った。  
「おまえがおれを殺ころしたのは、今からちょうど百年前だね」

私はこの言葉ことばを聞いて、はつきりと思い出した。今から百年前、文化五年のこんな暗くらい晩ばんに、この杉すぎの木の下の下で、一人の、目が見えない男おとこを殺ころしたということ。

そして、その時はじ初めて、自分は人殺ひところしだったんだな、と気がついた。そのとたんに、

背<sup>せ</sup>中<sup>なか</sup>の子<sup>こ</sup>が急<sup>きゅう</sup>に石<sup>いし</sup>のよう<sup>よう</sup>に重<sup>おも</sup>く<sup>な</sup>った。

夏目漱石（一八六七〜一九一六年）

日本を代表する作家。明治時代（一八六八〜一九一二年）から大正時代（一九一二〜一九二六年）の始めにかけて、活躍しました。

東京帝国大学（今の東京大学）を卒業後、高校や大学で英語を教えていましたが、三十八歳のときに初めての小説『我が輩は猫である』、次の年に『坊っちゃん』を書き、評判になりました。四十歳で、作家の道を歩み始め、亡くなるまでの十年間に『それから』『門』『こころ』などの名作を次々に発表しました。日本が急速に近代化した時代に、個人はどう生きるべきかをテーマにしたものが多く、今でも多くの人に読まれています。



ゆめじゅう や だいいち や だいさん や  
夢十夜 (第一夜・第三夜)

発行年月日:2024年2月29日

原作:なつめ そうせき ゆめじゅう や  
夏目漱石『夢十夜』

簡約:いわさきようこ  
岩崎容子

監修:NPO多言語多読

挿絵:茆一霖



NPO多言語多読

tadoku.org



この作品はクリエイティブ・commons表示-非営利-改変禁止4.0国際ライセンスの下に提供されています。

This book is licensed under CC BY-NC-ND 4.0

<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>